



ノーベル賞  
受賞者の  
警鐘

# 日本の科学研

短期的な成果のみ求める今の風潮では、今後ノー

# 究は危機に瀕している！

ベル賞はゼロになりかねない。受賞した3人が一斉に警告を発する。

**私**は折に触れ、今の時代に私が研究者を目指していたら、おそらくはじき出されていたろうと話してきた。若い頃はなかなか論文を出せず、エリート街道を歩いた研究者ではなかったからだ。それでも余裕のあるいい時代だったので、自由に研究をやらせてもらい、同じテーマを長年続けていくことができた。

しかし、現代の研究者はとてそんな余裕を与えられていない。この10年ほどで研究環境は大きく変わった。研究者は、安定的なポストに就けるか、研究資金が途絶えないか、そんな恐怖心に駆られながら、結果を出すためにもがき苦しまなければならなくなった。国の基盤的経費が減り、競争的資金を獲得し続けなければ研究もできなくなったので、すぐに結果が出る流行の研究に飛びつく研究者が増えた。未知の世界に踏み出すよりも、すぐに結果が出る、さらに役に立つと思える分野の研究を目指すようになった。

激しい競争だけが  
いい研究を生むのか

も過去の実績を重視することが多い。近年さまざまな民間財団による研究助成がなされているが、それも科研費の採択と同じように実績で判断される傾向がある。それでは今の日本の研究状況は変わらない。

私は、オリジナリティは激しい競争のみから生まれるとは思わない。それで長期的な科学力が育つのか、疑問に思う。

そこで私は昨年8月、従来のシステムでは支援が得られない独創的な基礎研究を支援するための財団を立ち上げた。独自性はあるが

なかなか研究費に恵まれない研究者、長期的な支援が必要な研究者、任期や定年などで継続が難しい研究者が、科学の世界に生き残れるようにしたい、という思いで財団を作った。

今は優秀な理系学生の多くが修士の段階で企業に就職し、博士課程に進む学生が少なくなっている。このような状況に一石を投じられればと思う。（聞き手・本誌：西澤佑介）

## 「可能性より実績」に懸念

日本の競争的資金制度にも問題がある。基礎科学を支える競争的資金は科研費だが、その審査はそれまでの発表論文数や掲載誌など、研究内容の可能性より



東京工業大学 名誉教授

大隅良典

おおすみ・よしのり●  
1945年生まれ。2016年「オートファジーのメカニズムの発見」により、ノーベル生理学・医学賞を受賞。



※著作権の関係で他の2名の先生の記事を割愛させていただいております。ご了承ください。